



まことに光陰矢の如し、一橋を卒業して早くも半世紀を経過、その大半を阪神間で送ったので、この地域への愛着は深い。これまで東京とは仕事の関係で頻繁に往復してきたが、生まれ育った武蔵野には「無沙汰勝ち」であった。しかし古稀を越してからは同窓会への出席が増えて、八王子から吉祥寺までの各地を訪れ、その変貌に驚くことが多い。

先日、小金井カントリーの付近を巡ってみたが、かつて皇太子（今上天皇）の疎開先でもあつた学習院跡は何もなく、桜堤も廻りは住宅に囲まれ、独歩の愛した樺林を通り抜ける散策は、中央線の沿線では難しくなっているようだ。年をとると最近のこととは忘れっぽいが、半世紀以上昔のことだが、例えば雨の降りしきる中、太宰治の自殺現場や、深夜の前進座の火災などを見に行つた情景が眼前に思い浮かぶのが不思議である。

学窓を出てからテニスとは縁遠くなり、中年からはゴルフに代わつたが、その熱も最近は冷めてきたのが寂しい。しかしこの地での思い出は鮮明になつてきている。特に神戸（六甲台）への遠征、合宿、その際の故闘轡指揮者の朝比奈隆氏との邂逅など、忘れ難い青春の一頁である。現在の住居が阪神の御影山手だけに、折りにふれて散歩道を如水会の平生大先生の記念館から神戸大学へと辿り、ありし日を偲び、旧友の面影を求めるこにしている。

一昨年だつたか、畏友城山三郎君に求められて、文芸春秋に余暇の過ごし方について書いた。「海をボンヤリ眺め

ることが好きだ。波間に昔の思い出や友の顔が浮かんでくる。」六甲台からの感想を書き綴つたのである。

あの時から半世紀、東京都外の変貌と比べると、学生時代に憧れた阪神間の風景の変わりようは小さい。もしより、数多くの宏壮な屋敷は近代的マンションに代わり、緑も減つてしまつてはいるが、丘から見る山と海、白い土と遠景のコントラスト等々、コントラストの美しい風景は変わらない。

今や、関西圏の経済活動の退潮は寝て伏さないが、いささかなりとも文化・都市の魅力を創造して内外の観光客を呼び込むことを、残された余生の仕事としたいと念じている。

記念誌に寄せて

如水会常務理事 加納誠二（昭和37年）



球朋会が50周年を迎えたこと、誠に喜ばしく心からお祝い申し上げます。

卒業以来40年間、何ら球朋会のお役に立てるこなく過ごしてきましたが、記念誌に一文を寄せるのは恥ずかしい思いですが、如水会の常務理事に現在就任しているということで、お指示がございましたので、僭越ながらお詫び申し上げる次第です。

学生時代、球朋会の存在は本当に有難かったです。年会費徴収は建前、お昼を駆走になるのが主目的に、諸先生をよく訪問しました。ラーメン・ライスで食事を癒していた当時、「」からの意を解して温かく迎えて下さつたこと、今でも感謝しています。

個人の懐具合は然る事ながら、軟庭部の財政も当時大変だったですね。部のマネージャーを担当した年には、資金稼ぎの為、ダンスパーティを開催。渋谷公会堂の予約、ナベプロ所属のバンドとの契約、パーティ券の印刷、販売。券を売り過ぎて公会堂ホールが溢れ、大クレームに冷や汗をいたことを思い出します。私の上で監督したのは、現会長の閔さん。企画力、交渉術、大したものでした。私事になりますが、閔さんにはその後もずっと公私